有島武郎研究

―「詩への逸脱」をめぐって㈢―

宮野光男

一

有島武郎著作集第二輯『宣言』のエピグラフには、“Whispers of Hevenly Death”の中の一篇、〈O Living always - always Dying〉が掲げられている。この詩は、有島訳の『ホキットマン詩集』第一輯〔大10・11〕に収録されているので記してみよう。

おゝ常に生きつゝ―常に死につゝ！
おゝ私の埋葬―過去と而して現在との！
おゝ私の埋葬、私がうつそ身で、誇らしくいつものやうに濶歩する間に！
おゝ私の埋葬、永年私であつたものが今死んで（私はそれを悲しまない―私は満足する）
おゝ私のつぎの亡骸から私を解放するために、その亡骸を捨てたところをふり返つて私は眺めながら！
前方に進んで（おゝ生きつゝ！常に生きつゝ）而して亡骸を後ろに見棄てるために。

この詩に託されている有島の思いは、いったい、いかなるものであろう。

〈死にかかっているようであるが、見よ、生きており〉(註1)とは、パウロの、福音にあずかる人間の生に関する認識であるが、〈常に生きつゝ―常に死につゝ！〉とは、その認識以前の状況、すなわち、埋葬さるべき〈過去〉の人間であることの表明であろう。

たとえ、それが、〈満足する〉ことができるものだと云ってみても、そのなかに、〈死〉を内包する〈生〉であるかぎり、それは〈埋葬〉さるべき人間でしかないという思いに対する共感が、おそらく、前半の部分を支えている思いなのである。そして、後半の部分からは、聖書のなかに描き出されている、信仰に生きる者の姿、たとえば、〈後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸しつつ、目標を目ざして走〔る〕〉(註2)者の姿が、あるいは、また、〈主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい〉という願いに対して、〈わたしに従ってきなさい。そして、その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい〉と諭(註3)された者の、その諭しに応える生き方が、新らしい生命の可能性を求める者のイメージとして、彷彿とわき上がってく

るのであるが、それは、いわば、新生志向ということのできる思いであって、このところに、この詩をエピグラフとして掲げた有島の内的必然性を見ることができるのである。

裸かなる真実、いつはらざる誠実を三人は知つた。不倶戴天の敵であり、同時に情を等しうする殉教者たる三人は、過たず踏はず各々の道を行かねばならぬ。〔「宣言」〕

登場人物のひとりであるBの、Aに対する〈宣言〉の一部であるが、これは、また、AやY子も、Bとともに、新生志向者であることの宣言でもあろう。〈運命の波頭は容赦なく僕等三人を真実の巌頭に打ちつけ…三人は傷いた〉ものであるにもかかわらず、である。

たとえば、Aは、Y子との恋愛を成就したかに見えたAは、親友BとY子とに裏切られてしまうのであるが、その状況を、有島は、〈僕は生きながら死んでゐた、死にながら生きてゐた〉というAとして描いている。まさに、〈常に生きつゝ、常に死につゝ〉だったのである。Aは、この状況を、さらに、〈ゼンマイ〉の切れてしまった、〈十一時半でとまつてゐる…使ひ古した時計〉でもって、象徴的に表わしているが、それは、Aが、歴史的時間を失った存在であり、全く無意味な、廃墟的存在であることを、つまり、死んだ状況であることを表わしているのである。

そのような状況認識をもっていながら、Aは、なお、最後の書簡で、

心よ。忍んで待て。
黎明の空の端に、二月二十三日の太陽が今昇り始めた。
僕はそれを見つめて居る。

というのであるが、このところに、Aが、「迷路」〔大7・6〕のAの、〈夜だけでもせめて早く明けるがいゝんだ〉という呟き、〈黎明はまだ来なかった。黎明前の闇は真夜中の闇よりも更に暗かつた〉、という闇の認識とは対称的な、人生における光の希望を持とうとしている、言い換えれば、新生志向者であることを見ることができるのである。

〈過たず踏はず各々の道を行かねばならぬ〉というBにしても、〈人間の事業といふものが一体何んだ。どんな大きな事業でも要するに地球と一緒に滅びて跡方もなくなる砂の楼閣〉でしかないことを知っている、虚無的存在である。あまつさえ、人間が、〈人間の予知を幾重にも裏切る恐ろしい力―神的なのか悪魔的なのか自分は知らない―によつて、人が真実に目覚めて行くに従つて、段々苦しい運命に這入り込んでしまう場合にだけ、本当の意味の悲劇は成立つ〉ものであることを知っている、運命論者でもある。それにもかかわらず、Bもまた、〈来るべき総ての戦を雄々しく戦ひ、回避する事なしに戦ふ事を誓ふ〉ところの、未来における成就を信じている、つまり、新生志向者なのである。

Y子については、ファニーや、愛子と同様、印象的な眼をもった存在であり、有島の、一種の理想像である poetic woman の顕現

として描かれている存在であることなど、すでに、いささか言及したことがあるので[註4]、重複は避けたいと思うが、彼女の手記を通して明らかにされている自己主張のなかに、

性の欲望も目覚め…女の本能が、世の中の習慣など申す事を忘れさせ…いゝ加減に事を切り上げては置けない人間になつて居りました。

と告白する女性であることを表わしているところなどは、あたかも姦淫の女を、Egoと名づけ、彼女が、人間として、最も根源的な愛を、あえて姦淫という、反社会的な行為を通して求め続けた存在であるとした有島の、Y子に対する基本的な期待が示されているところなのである。

〈「宣言」では、新しい自分といふものと、新しい女の意識に目覚めて行く一人の処女―そして其等に対して可成勇敢な処女を書きたいと思ひました〉〔「現代作家の取扱ふ小説中の女性」　山田昭夫・内田満編『資料有島武郎』上巻　昭50・1　桜楓社刊所収〕という、有島の、Y子自註からも明らかなように、彼女もまた、新生志向者のひとりなのである。

つまり、「宣言」という作品は、それぞれが、有島の分身である、A、B、Y子という三人の人物像を通してなされた新生志向者宣言を、その内容とするものであり、掲げられているエピグラフはそのテーマを端的に象徴しているように思われるのである。

二

ところで、A、B、Y子によって表わされている新生志向を、内面から支えているもの、言い換えれば、ホイットマン詩のエピグラフに示されている生への可能性―〈過去とそうして現在との…私の埋葬…亡骸から〔の〕解放〉の可能性の根拠を、有島は、いったい何処に見出すことができるのであろう。それは、パウロによれば〈死にかかっているようであるが、見よ、生きており〉という状況が〈神の僕としての〉[註5]人間であることによって可能になる、というのが、聖書的人間観であるが、この時点において求めうる有島の、生命の根拠が何であるかを問うことでもある。

エピグラフのホイットマン詩に対する、有島の直接の解釈は見当らないが、〈忍んで待〉つ者にとって、著作集第三輯の巻頭に掲げられているホイットマン詩は、その問に対する有島の、ひとつの答えになるものと思われる。

おお君ら世の嫌われ者たちよ、少なくともぼくだけは君らを嫌うことはなく、
直ちに君らの群のまん中に入り込んで、君らを歌う詩人となろう、
ほかの誰に対してよりもまず君らにこそ愛をそそごう。〔「天然に帰る瞬間よ」　杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳『草の葉』下巻　岩波書店　昭44・5〕

著作集第三輯は、『カインの末裔』〔大7・2〕であるが、このエピグラフのホイットマン詩は、“Children of Adam”のうちの一

篇、〈Native moments〉の後半の部分である。

このなかに表わされている〈ぼく〉、否定的存在を、ありのままの姿で、全面的に受容しようとする〈ぼく〉は、魅力的な存在であるが、このところに、招く者としての〈わたし〉を、すなわち、有島が、ホイットマンのなかに見出そうとした、救いの可能性の、ひとつの顕現を見ることができるのではないだろうか。

ホイットマンは、この詩の前半で、〈なかでも卑しげな人物をぼくは一番親しい友として選び出す〉という。そして、その彼を〈友〉と呼び、〈思いきり無法に、粗野に、無学に振舞う〉ことを勧め、〈すでに為された所業のために人から非難されても構いはせぬ〉というのである。このようなホイットマンの呼びかけから想起することのできるものは、〈人からは度外視され、自然からは継子扱ひにされる…カインの末裔なる仁衛門〉である。しかも、彼が、〈人間の已むに已まれぬ生に対する執着の姿〉を、有島に託された存在であることは、「自己を描出したに外ならない「カインの末裔」〔大8・1〕において明らかであるが、そのような存在に対する、ホイットマンである〈ぼく〉の、〈おお君ら世の嫌われ者たちよ〉という呼びかけは、それ自体、カインの復権の基本的な条件を表わしているのである。なぜならば、呼びかけは、対象に対する人格としての承認を前提とするものだからである。しかも、この呼びかけが、

「お前もか、己れもやつぱりお前と同じ先祖はアダムだよ」とか何とか云つて見ろ。己れだつて粗忽な真似はし無えで、兄弟とか相棒とか云つて、皮のひんむける位えにや手でも握つて、祝福の一つや二つはやつてやる所だつたんだ。…」〔「かんかん蟲」明43・10〕

というアダムに対する親近感―有島の、カイン像にみられるアダム像との混同については、かつて述べたことがあるので詳述はしないが―に見られる、有島の、アダムの子供たちに対する仲間意識や、真実の人間であることの主張と、等質の人間観に支えられたものであることは、「或る女」において、葉子の、倉地に対する思慕の情が、イヴの、アダムに対するそれとして、比喩的に表現されていることからも明らかなのであり、カインの復権を目論む有島の期待に応える呼びかけなのである。(註6)

有島の、ホイットマン詩にみられるカインへの呼びかけ―つまり否定的存在に対する全面的な受容の姿勢―に対する憧憬のなかに、有島文学において追求され続けた、カインの復権を可能にするものの、ひとつの答えを見出すことができるということは、有島文学の主題が、ホイットマン詩の主題の、一種の変奏であることを表わしているということになろう。そのことを、最も端的に象徴しているのがエピグラフなのである。

そして、エピグラフにおけるカインの復権の可能性の提示は、カインの末裔性の否定を意味するものではない。むしろ、カインの末裔であることの、人間としての正統的存在性の主張であり、一見、反聖書的ですらある。しかし、キリストの完全なる死が、復活の前提であることを思うとき、人間の、カインの末裔としての自覚は、復権の絶対条件でもあることを知らねばならないのである。その意

味で、ホイットマンの呼びかけは、人間が、まさに、カインの末裔であることの自覚をうながす、一つの契機でもあり、〈誰も気も付かず注意も払はない地球の隅つこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでゐる〉〔「生れ出づる悩み」大7・9〕、その誕生を待ちながら、〈謙遜な讃歌〉をうたう〈歌手〉でありたいという〔「生れ出づる悩み」広告文〕有島にとって、〈直ちに君らの群のまん中に入りこんで、君らを歌う詩人となろう〉というホイットマンは、いまや大きな存在なのである。

三

エピグラフのなかに謳い出されている、〈ぼく〉、すなわち、カインの復権を可能にするものが、〈忍んで待〉たれている存在であることは、文脈より明らかであるが、「アダムの子供たち」の第一歌、「世界という楽園を目ざして」の一節に、〈今ここにありてぼくは前方を窺いつつなおも進みゆく、／ぼくと並んであるいはぼくの背後からイブがつづき、／あるいは前にまわれば、今度はぼくが同じように彼女のあとにつづいて進む〉、とあるように、それは〈アダム〉であり、〈ぼくアダムの歌の歌い手〉〔「いつの時代にも折折に帰来しながら」〕である、ホイットマン自身のことでもある。

〈アダムであるぼく〉〔「自発的なぼく」〕であるホイットマンが、有島にとって、ローファーの一典型であり、ロダン、ミレー、イブセンなどと同列に、イエスもそのひとりに数えられている〔「ホキットマンに就いて」大9・10〕ことについては、すでに指摘されて久しいことである。そして、有島にとって、イエスがローファー的存在であるということは、イエスへの期待が、人間イエスへの憧憬の一変形であり、それが、ルナンの説く人間イエスの影響の顕現であることについては、すでに述べたところであるが、(註7) ホイットマンが、自らを、アダムと称しているということは、友人オコンナー(註8)がホイットマンをして〈モダン・キリスト〉と称していることをひきあいに出すまでもなく、ホイットマンと人間イエスとの等質性を考えるための、ひとつの有力な手がかりなのである。

キリスト教信仰の世界において、イエスがキリスト〔救世主〕であることへの期待が、新生のアダムへの期待としてなされていることは周知のことである。たとえば、〈アダムからモーセまでの間においても、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配を免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である〉(註9)とあるように、イエスは〈第二のアダム〉として、アダムの末裔である人間を、罪と死とから救い出す存在とされているのであるが、いまや、ホイットマンはその〈第二のアダム〉ともいうべき存在として、つまり、イエスとして、自らを詩のなかに形象化しているのである。

〈私は今自己を披露し、自己を歌ふ〉〔「自己を歌ふ」〕というとき、それは、自伝的なホイットマンの可能性もあるにちがいない。しかし、〈私はワルト・ホキットマン、自然があるやうに自由で快活だ〉〔「名もない淫売婦に」有島訳〕とうたい出されたホイットマンは、愛の実現者イエスのイメージの形象化されたものであり、イエスの愛を、激しく、切実に求めているホイットマンの思い

そのものの形象化されたものだということもできるものなのである。それは、たとえば、遠藤周作が、〈母なるもの〉の象徴としてイエスの母マリアを描くときに、それが、無条件に、無制限に、罪なる人間を受容するキリストの愛の、一種の象徴であるのと、おそらく、同じことなのであろう。[註10]それらのものは、いずれにせよ、作家における主体的事実の形象化されたものであることにちがいないのである。

有島の、ホイットマンへの共感の内部にあるひとつの要素としてこの、愛の実現者の象徴としてのイエス憧憬は、おそらく、〈忍んで待〉望されている存在に対する憧憬と、その本質において等しいものであろう。ホイットマンの〈愛する兄弟よ、／…喜びを以て私はあなたを撰び分ける、おゝ私の道伴れよ、…〉〔「十字架にかけられた彼に」有島訳〕というイエスへの呼びかけは、有島自身の思いの表明でもある。

「カインの末裔」が、〈人間の已むに已まれぬ生に対する執着の姿〉を描こうとした作品であるにもかかわらず、〈無解決な、否定的な結末〉〔「自己を描出したに外ならない「カインの末裔」」〕感を与えるという一面をもっているということは、「カインの末裔」における否定的人間観に対する当然の評言であるが、あえて、有島が〈生に対する不思議な我執〉〔同前〕を描いたものだとして、その批評に反論しているのも、おそらく、そのためであろう。その意味では、エピグラフとして掲げられているホイットマン詩は、カインの絶望の呟き、〈わたしの罰は重くて負いきれません。あなたは、きよう、わたしを地のおもてから追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。わたしを見つける人はだれでもわたしを殺すでしよう〉、に対する神の言葉、〈いやそうではない。だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしよう〉の、[註11]極端にホイットマン化された、ひとつの表現だということもできるのである。そのことは、著作集『カインの末裔』に収録されている作品の人間像が、否定的であることによって、より印象的になってくるのである。

四

たとえば、「カインの末裔」における人間存在の根源的虚無を、カインの末裔意識ともいうべき否定的人間観において認識する可能性、[註12]あるいは、「実験室」における、〈科学者のみずから招いた内部腐蝕の苦悩〉[註13]に対する、自然科学の、言い換えれば〈智的生活〉〔「惜みなく愛は奪ふ」大9・6〕の無力性の認識を通して語られている虚無的人間像の描出、[註14]さらに、「凱旋」において、将軍の感じている、〈心にあまる程な虚ろな真暗な世界が果てしもなく拡がつてゐるやう〉な思いや、〈総てが無駄だと知〉り、〈疲労にけおされて浅い眠りに落ちた〉凱旋という老馬に託された、栄光の果てにひそむ凋落の悲哀などは、この著作集の作品に底流する、有島の基本的な人間観における否定の認識の、それぞれの表現なのである。

ところで『カインの末裔』における四番目の作品、「クララの出家」は、前半三つの作品に比べて、宗教的色彩の濃い、印象の異った作品である。かつて、この作品を、あえて非神話化するならば、

フランシスに象徴されている愛の実現者によって、〈神の処女〉と呼びかけられているクララは、ホイットマンに、〈わが娘よ〉と呼びかけられているところの、愛を求めてやまぬ〈名もない淫売婦〉に等しい存在であり、このところに、有島の、愛における人間関係回復の成就を求める姿を見ることができる、と指摘したことがあるが、[註15]その意味では、この作品が、著作集『カインの末裔』のなかにあって、エピグラフに記された、カインの復権の可能性を形象化しようとしたものだということができるのではないかと思われるのである。しかし、それは、聖者フランシスではなく、人間フランシスが、そして、聖女ではなく、愛を希求するクララが、描かれているという意味で、やはり、〈カインの末裔〉が描かれている作品なのである。

〈これも正しく人間生活史の中に起つた実際の出来事の一つである〉と、作品の冒頭に書き記しているように、有島は、クララの出家が、人間の次元の出来事であることを、まず確認しようとしているのである。このことは、有島が、聖者フランシスを、より人間的側面から捉えようとした、ポール・サバティエの、『アッシシの聖フランシスの生涯』によって、人間的魅力を強調したフランシス像を形象化しようとしていることと、無関係ではないはずである。

有島が、サバティエのフランシス伝によって、この作品を書いていることについては、笹淵友一、小坂晋、高原二郎、福本彰の各氏によって指摘され、論じられてきているが、[註16]下村寅太郎氏の、『アッシシの聖フランシス』〔昭40・12　南窓社〕によって知ることができる、サバティエの特色―〈ルナンから触発された歴史家であること〉、〈ルナンもサバティエも傾向的思想家であること…ルナンの『イエス伝』は―伝承的な叙述中の超自然的要素を排除してイエスを専ら崇高な人間として扱っていること〉、すなわち、それまでのフランシス伝が、いわゆる〈聖者伝〉であり、〈近代の人間には魅力に乏しい〉ものであったのに対して、〈十九世紀のロマン主義的中世趣味を動機とする〉フランシス像であり、その礎石が、サバティエによって据えられたという事実―は、有島の、ルナンに対する共感と傾倒とに、重りあうことがらであることを知ることができるのである。このことは、ルナンによるイエスの非神話化は、サバティエによるフランシスの非神化と等質のものであり、ともに、人間の可能性に対する期待の表明であるという意味で、有島の希求する愛の実現の具体化の可能性を考えるための、ひとつの手がかりを見出すことができる、興味深い事実なのである。

有島は、内村鑑三を通して、サバティエの存在を教えられた〔日記、明36・1・4〕のであるが、その『聖フランシスの生涯』を通して知ることのできる、いくつかのエピソードは、有島に、フランシスに対して同志的感情を催させただけではなく、さらには、影響関係をも考えることができるものなのである。

たとえば、『聖フランシスの生涯』のなかの一節、〈Struggle and Triumph〉を読んだときの感想〔日記、明36・1・6〕などは、〈我もFrancisと共にemotionによりて震へぬ〉とあるがそれは、このところに引用されているフランシスの、金銭、衣服など、父親から受けた一切の物質的恩恵の拒絶と返還に対する印象を

述べたもので、さらに、〈男らしき人なりしかな〉という思いにも表われているように、やがて、私有財産否定、あるいは、父親、家の否定の思想形成に発展してゆくものの原拠のひとつと考えることができるものなのである。[註17] あるいは、有島の、久保正夫訳『完全の鏡』に付された序にみられる、ヂャッキノ・ディ・フィオーレの、〈人生を三期に分つて予言した言葉〉―〈天父の支配…神子の支配…聖霊の支配〉に対応する〈奴隷的服従の時期―畏懼、孝道的服従の時期―信仰、自由到来の時期―愛〉に対する、〈深く私の心に徹し〉たという感想は、有島の唱える〈習性的生活〉〈智的生活〉〈本能的生活〉という、人間生活の発展段階の本質に関わる認識に対する共感の表出であり、それが〈聖者〔フランシス〕の先駆者とも云ふべき〉人物への関心である、という意味で、傾聴に値するものである。[註18]

なかでも、有島の教会退会が、その教会批判を見ても明らかであるように、―たとえば、明治四一年一月二二日付、同二八日付の日記などに見られる記事が、その好例である[註19]―制度としての既成のキリスト教会に対する批判が、その原因のひとつであったことなどはよく知られていることであるが、これなどは、フランシスの、〈腐敗に腐敗を重ねた羅馬法王庁下の悪教〉〔「旅する心」大9・11〕に対する批判と、その根底において響きあうものをもっていたのではないかと思われるところである。

このことは、有島が関心をもっていた詩人のなかのひとりに、山村暮鳥がいるが、暮鳥の、フランシスに対する傾倒の特色が、〈放蕩の末の回心、そして詩聖としてのフランシスは、正に当時の暮鳥に理想的人間像として捕えられた筈であり、それは又、暮鳥が荒廃した教会に批判的立場をとり、人間キリストを主張したことと同一線上で理解出来る〉[註20]というものであって、それが、有島の、フランシスへの関心と、本質的には同じものであったことが、有島の、暮鳥の詩に対する共感というかたちで顕われたのであろう。[註21] つまり、暮鳥がそうであったように、有島も、聖者フランシスに対する憧憬ではなく、サバティエに触発されながら、〈神信者であるより以上詩人であった…詩をもつて始まり、詩をもつてつらぬき、詩をもつて終つた彼の一生は徹頭徹尾詩であった〉[註22]、人間フランシスに対する憧憬をもっていたのであり、そのことが、ひとつの契機となって、有島に、より実現可能なイエス像をもたらしたということもできるのではないだろうか。その意味では、〈我は此聖者の最も基督に近き人なりしを思ひぬ〉〔日記、明39・10・21〕という感想は、有島の、フランシスへの、また、ホイットマンへの、接近の、内的必然性を解明する、ひとつの有力な鍵として位置づけることができるものなのである。

五

クララの出家と、それ以後の、フランシスとの関係については、世に伝えられている聖女伝に詳であるが、下村氏の指摘〔『アッシシの聖フランシス』〕にあるように、〈アッシシの名門の若く美しい貴女が、深夜父の城館を脱け出ててフランシスの乞食団に投じた「劇的」な情景や、シモーネ・マルチニによる美しい修道女の肖像からの、詩的想像の中に生きているクララの外に―このイメージの外に、クララその人の生涯の内容は一般に知られること乏し〉く、

「聖者伝」にしても、〈クララの内面の歴史、心の歴史については手掛りになる記述はなく、〈聖女は初めから聖女であって、魂の発達の如きものをこの書に期待することはできない〉、その意味では、クララは、まさに、〈我々自身によつて構想する外はない〉存在なのである。

もち論、有島は、クララ像を形象化するにあたっても、サバティエの「聖フランシスの生涯」を拠り所にしているのであるが、その態度は、笹淵氏の指摘[註23]にあるように、〈サバティエの霊肉論の影響〉を受けており、とくに、氏の、作品中に引かれている、〈著者の知れない或る古い書物〉のなかの一節だとされている、〈肉に溺れんとするものよ。肉は霊への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺くむものは霊に至らざればやまざるを知らざるや。…〉が、サバティエの思想そのものであるという指摘は、クララの愛が、氏の、〈有島の理解によれば、最初は純粋に人間的でないまでも、人間的愛を混じており、やがて人間的愛を階梯として聖愛に導かれたものであった〉という考え方の根底をなすものであって、傾聴に値するものということができよう。このところに、有島が、「宣言」のなかで、人間の肉的存在であると同時に霊的存在でもある、つまり、聖性と魔性との同時的存在の可能性をもった存在であることを、夢の中のボッチチェルリのヴィーナスに託して表現したことの、より発展的な直截的な表現を見ることができるのである。

六

「神の処女」

フランシスの、この、厳かな声の背後には、〈落着いた愛に満ち〳〵てクララの眼をかき抱くやう〉な眼差しがある。その眼の前に立つたクララの〈一向の熱意に輝く美しい眼〉〔「旅する心」〕もまた、〈燃える眼〉であり、〈涙が溢れ〉る眼である。おそらく、それは、名もない娼婦の眼にも、〈わが娘よ…〉と呼びかけられたとき、満ち溢れたにちがいない、〈云ふ可からざる懺悔と、懼喜との涙〉〔日記、明36・2・8〕をたたえた眼であろう。このところに、有島の求めてやまぬ〈全愛〉〔同前〕の成就の姿を、言いかえれば、「宣言」のエピグラフによって、象徴的に表わされていた、有島の新生志向実現の可能性の、さらに言いかえれば、カインの復権の可能性の、ひとつのかたちを見ることができるのである。

しかし、それが、人間イエスによる成就であるという特色と同時に、一種の限界があることに、留意しなければならないのである。

クララの世界における、一種の幻想的情緒は、有島が、その人間の愛の限界性を越えようとするときの、ひとつの試みであろう。しかし、クララの、〈底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらはれにも嵐のやうに感動した〉という、忘我恍惚の境地は、「クララの出家」の一応の結末ではあっても、それが完璧であればあるほど、非現実のものであるとの感は、いやまさり拭い去ることはできないのである。そして、たとえば、ガブリエルの聖告に対するクララの応答のなかに、〈全身は嘗て覚えのない苦しい快い感覚に木の葉の如くをのゝい〉ていること、いまや身も心

も神に捧げているクララの、出家の朝の心の動き―それは、〈瀕死者がこの世に最後の執着を感ずるやう〉な熱い思いに満ちたものであり、〈クララの眼は未練にももう一度涙でかがやいた〉ことを見逃すことのできぬクララの事実として、書き添えている有島のなかに、人間の愛の限界を越えることのできない姿を、垣間見てしまうのである。

それは、いわば、有情のクララが描かれているということになるのであるが、そのことは、「クララの出家」にあっては、クララの否定的自己認識の方が、聖女クララであることの認識よりも、より現実感をもっていることからも明らかである。

はつと驚く暇もなく、彼女は何処とも判らない深みへ驀地に陥つて行くのだつた。彼女は眼を開かうとした。然しそれは堅く閉ぢられて盲目のやうだつた。真暗な闇の間を、颱風のやうな空気の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて行つた。「地獄に落ちて行くのだ」瞻を裂くやうな心咎めが突然クララを襲つた。……クララはとんぼがへりを打つて落ちながら一心不乱に聖母を念じた。

第一の夢の中で、クララの見た、自分の地獄に堕ちゆく姿の幻影は、出家の前提としての痛悔である。しかし、この、いわば深淵転落感ともいうべき否定的自己認識が、すでに述べたように[註24]、葉子にあるいは「運命の訴へ」〔大9〕の佐間田信次に継承されているということは、クララに託された有島の、〈肉の世界から逃れる事が出来た〉という認識が、一種の錯覚であったことを思い知らされるのである。そのことは、フランシスへの思いを通して、〈心を籠めて浄い心身を基督に献げる機ばかりを窺つてゐた〉という、そのクララの思いが、〈おぼろげながら神といふものを恋しかけた十二三歳頃の葉子〉が、〈十四の夏が秋に移らうとした頃、…不図思ひ立つて、美しい四寸幅程の角帯のやうなものを絹絲で編みはじめ…早く造り上げてお喜ばせ申さう〉としたことと、おそらく本質的には、差はないはずである。二十五歳になった葉子が、つくづく感じ取っている人生の虚無を、夢幻の世界で、クララが予感しているのも、その意味では、不思議なことではないのである。

その筆法をもってすれば、第一の夢に顕われる、両親や許婚オッタヴィアナなど、ゆかりの者たちの、泥沼に沈みゆくイメージは、ダンテの「神曲」における地獄の様相を思わせるものであり、天使ガブリエルの聖告の場面は、「大洪水の前」のナアマが、堕落天使サミアサに心惹かれてゆく姿の中にみせている、罪の女の末期を思わせる痴態を彷彿とさせるものであることも、有島の女性像の原点に位置づけられる、姦淫の女 Ego の、〈愛は成就せられず〔我が〕心は痛ましく悲しき大なる空虚を得〉〔日記、明36・2・8〕た姿の反映だということも可能になってくるのである。

このような状況のクララの行きつくべきところが、『瞳なき眼』の死の世界であることは、云うまでもないことである。それは、求められている愛が、人間の愛であるがゆえにもたらされる現実感と限界性の顕現としての死なのである。

美しい畫を集めた書物から落ちて／突風にさらはれた二ひらの落丁。／一つは高く、／一つは低く、／見かはしながら、／見失ひながら、／また遙かに見かはしながら、／乱れつゝ散る。〔「思ひ」〕

この、『瞳なき眼』の中の一篇の詩に、〈とんぼがへりを打つて落ち〉てゆくクララの姿を見ることは、もち論、この段階では早計にすぎるであろう。ここでは、あくまでも、深淵に転落してゆくクララを、支える存在として、フランシスが対置されていることに、有島の積極的な意図を読み取るべきなのである。有島には、まだ、その人間イエスに等しい、聖なる人間フランシスの愛の実現の可能性を、追究してゆくプロセスが残されているのである。

愛の実現者を追求してゆくプロセスは、一方においては、瞳憧憬というかたちでなされているということはすでに指摘してきたことであるが、[註25] 著作集に、エピグラフとして付されたホイットマン詩との関連において解明せんとするプロセスにあっては、"Sometimes with one I love" と "I exist as I'm" の二つの詩をエピグラフとしてもっている、著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』〔大9・6〕に至るまでの、有島文学における愛の表現における多様性について考察しなければならないことを、第五輯以下の著作集のエピグラフは物語っているのである。その中にあって、人間の愛のもっている特色とその限界性は、より明確にされるであろう。

註1 「コリント人への第二の手紙」第六章九節
註2 「ピリピ人への手紙」第三章一三節～一四節
註3 「マタイによる福音書」第八章二一節～二二節
註4 有島武郎研究―瞳憧憬をめぐって―〔「梅光女学院大学日本文学研究」第十号 昭49・11〕
註5 「コリント人への第二の手紙」第六章八節
註6 「教会退会後の自然観をめぐって (三)」
註7 「キリスト論の考察」
註8 清水春雄『ホイットマンの心象研究』〔訂正版〕昭和43・11 篠崎書林
註9 「ローマ人への手紙」第五章一四節
註10 「近代日本文学のなかのマリアたち―遠藤周作の場合 (一)―」〔昭51・7・30 「キリスト教と文学」研究会九州支部例会〕
註11 「創世記」第四章一三節～一五節
註12 註6に同じ
註13 山田昭夫「「実験室」覚え書」〔『有島武郎・姿勢と軌跡』昭48・9 右文書院刊所収〕
註14 「教会退会後の自然観をめぐって (一)」
註15 「本・批評と紹介「有島武郎 志賀直哉 長与善郎集」―近代日本キリスト教文学全集6―」〔「本のひろば」 昭51・12〕
註16 ①笹淵友一「有島武郎『クララの出家』の主題―文学研究における性心理学的方法の可能性と限界」〔「東京女子大論

集」昭40・3〕
②小坂晋「『クララの出家』再論—笹淵博士の批判に対する反論」〔「日本近代文学」第六集　昭42・5〕
③高原二郎「二つの『聖フランシス伝』について—有島武郎・倉田百三比較試論」〔「立教大学日本文学」第二十三号　昭45・3〕
④福本彰「『クララの出家』論—夢と有島的苦悩を巡って—」〔「潮流」三号　昭47・6〕

註17　江頭太助「有島武郎の聖フランチェスコ受容・試論」〔「キリスト教と文学」研究会九州支部例会　昭52・7・25〕

註18　このことに関しては、註16の③で、指摘されている。

註19　註6に同じ

註20　和田義昭「聖フラスチェスコとの出合い」〔『山村暮鳥と萩原朔太郎』昭51・7　笠間書院刊所収〕

註21　有島と暮鳥との出合いは、暮鳥が、彼の雑誌「苦悩者」〔大7・10刊〕を、有島に贈ったことによって生じたのであるがその、大正八年二月号に発表された長詩「真実に生きようとする自分の詩」に対して、有島は、篤実な讃辞を呈している。〔暮鳥宛書簡、大8・2・2〕

註22　山村暮鳥「詩僧」〔大5・8〕

註23　註16の①に同じ

註24　有島武郎研究—盲目状況認識をめぐって—〔「評言と構想」第三号　昭50・10〕

註25　註4・24に同じ

付記　註6・7・14の各論は、拙著『有島武郎の文学』〔昭49・6　桜楓社刊〕所収論文である。